

---

# 「不妊治療現場の過去・現在・未来」

連載 2

## ～ 生殖革命の時代 ～

荒木 晃子

---

### 注目されなかったトピックス

第二次世界大戦終結 3 年後の 1948 年、国内では男性不妊の問題解決に、夫以外の第三者からの提供精子を用いた非配偶者間人工授精<sup>\*1)</sup>が始まった。今から 62 年前の出来事ことである<sup>(\*)</sup>: 婚姻関係にあるカップル以外の第三者の男性から精液・精子の提供を受け、妻の子宮に注入する手技。婚姻関係にあるカップルの場合は配偶者間人工授精と呼ぶ)

### 生殖革命の夜明け

同じく 1948 年、フランスではウサギを使い哺乳類最初の体外受精<sup>\*2)</sup>に成功した<sup>(\*)</sup>: 子宮の外で、オスの精子とメスの卵子が自然に受精する環境要因を人為的に整え、その後受精卵をメスの子宮に戻す手技)。その 30 年後 1978 年には、イギリスで人類初の体外受精児が誕生することとなる。体外受精で誕生したルイズ・ブラウンという女兒は「試験管ベ

ビー」と呼ばれ、さらに 5 年後の 1983 年、日本国内でも初めての体外受精児の誕生に至った。世界各地で生殖革命が始まったのだ。日本の生殖医療技術は、その後現在まで、常に世界水準を保持し続けている。

戦後といえば、創刊号で「沈黙の時代」を語った A 子さんが生殖年齢を生きた時代でもある。敗戦を期した日本ではあるが、戦後の復興に追われ飛躍的な経済成長の水面下で、生殖技術は進化し続けていたのだ。それを裏付けるかのように、戦争終結の 3 年後 1948 年には、国内で法律学者などを含めた慎重な検討の後に、第三者から提供を受けた精液・精子を用いる非配偶者間人工授精が始まっていたことを知ったときは、正直、驚きを隠せなかった。

前回 A 子さんは、「(前略) 戦争で男の人がみんないなくなってしまうと、結婚するにもまわりはおなごばかり。相手を選ぶな

んてできない時代だったからね。」と述べた。この語りから、日本国内では、多くの青年を戦場に送った結果、婚姻対象となる成年男子が減少していたことを知った。それと同時期、非配偶者間人工授精が始まったという事実は“彼女の語りと何か符合する”と感じたのは、私だけなのだろうか。1948年から現在までの62年間に、婚姻関係にあるカップルに非配偶者間人工授精により生まれた子どもたちは、国内で累積するとすでに一万人以上いるといわれている。この事実をどれだけの人知っているのだろうか。第三者からの精子提供の問題は、代理出産や卵子提供の問題と共に、いま、まさに最先端生殖医療の在り方を問う重要課題の一つなのである。62年もの間先送りされてきたこの課題を含め、「不妊問題を未解決のまま次世代に残さない」こと - これが、現代に生きる我々に与えられた課題なのだ、そう確信した。

### 不妊を治療する時代の到来

生殖革命は「家族の不妊問題」にどのような改革をもたらしたのだろうか。医学史にも、社会史にも残されていない、「不妊問題を抱える家族」がむかえた生殖革命の実際を聞く機会を得た。不妊を治療する選択肢を得た家族に、一体、何が起きたのだろうか。

日本国内で初の体外受精児が誕生した1983年に、自らも不妊治療を始めた女性(B子さん)と出会った。Bさんは、現在50歳代の働く独身女性、子どもはいない。現在の彼女を見て、「不妊に悩み、不妊治療を受けた女性だ」と思う人はまずいないだろう。結婚後、子どもができないことを悩み、夫婦で話し合って不妊治療を開始したとい

う。生殖革命と同時期に、自らの不妊問題を生殖医療にゆだね、不妊を治療することを選択したBさんに、「生殖革命で家族に何が起きたのか」を問うてみた。

### 「生殖革命の物語」

#### エピソード 福音をきいた女性の語り

「松・竹・梅って、おすし屋さんの出前にぎり寿司にランクがあるでしょ？私の不妊治療のスタートは、そこだったのよ。まったくふざけた話よね～」

“松竹梅のにぎり寿司”をたとえに、彼女は自分の不妊治療体験を語りはじめた。50歳になり、子どもを産むことも育てることももう悩む必要はなくなったわ、と晴れやかな笑顔で語るBさんは、「不妊に悩むことがなくなる日が来るなんて、今まで考えたこともなかった」と言葉を添えた。

「命がけ・・・あの時は、本当にこの言葉がぴったりだった。子どもが産めるなら、自分の命も惜しくはないと思った・・・これ、正直な気持ち。ほら、自分の子どもを救うためなら、母親は火の中にも飛び込む、というでしょ？その気持ちと同じ。子どもを産んでもいないのに、おかしな話よね。でも、子どもがほしい一心で、痛くて辛い高額な不妊治療に通い続けたあの頃の自分をふりかえると、気持はまるで母親だったとおもう」

友人とのおしゃべりが何よりの好物、と自己紹介したBさんは、「不妊の話」ができることを喜んでいる様子だった。しかし、「命がけ」とはただならない。こころして話を聞かねば、そう思った。かくして、話し好きなBさんの物語は、「命がけ」とい

う言葉で幕を開けた。

「結婚して2年ほどたった頃かしら？なかなか妊娠しないので、近くの市民病院の産婦人科を受診。医師からは『妊娠しやすくなるように』といわれ、通院することにした。検査も異常なかったし、『ああ、通院すれば大丈夫なんだ！』って気軽に考えていた。でも、半年以上が過ぎたころかな・・・ほら、病院の産婦人科って、おなかの大きい妊婦さんが沢山いるでしょ？小さな子供連れの親子もいる。もともと子どもが大好きだったから、最初のうちは声をかけて、『おいくつですか？』とか、隣に座った母親と話をしたけど、そのうち、子どもを見ると涙は出てくるし、妊婦さんを見ると自分がみじめになるし・・・最後には通院できなくなった。『友人は結婚し次々に子どもが生まれるのに、自分だけ何年たっても妊娠しない』ことを悩んで家族や友人に相談し、ついには、『妊娠するための本』を読みはじめたり・・・笑えるでしょ？！」

おかしくはなかった。笑顔で語りつづけるB子さんの話は、決して“笑える”話ではない。軽快に語りつづけるB子さんの表情と、その話の内容は不一致で、聞いている自分が“どう反応すればよいのか”戸惑った。彼女は28年前の体験をまるで昨日の出来事のように詳細に語り続けた。

「相談した友人や義理の家族などから、『あそこの病院がいいらしい』、『この先生は不妊が専門らしい』などと聞いては、次々に通院先を変えた。でも、結果は同じ。そんな時、ある不妊専門Yクリニックの院長が出版した本と出合ったの。その頃、『不妊』という言葉さえ知らなかった私は、衝撃を受けた。そうか、妊娠しないのは不妊症という病気なのか - そう思ったら、なんだか

心が軽くなった気がした。病気なら治さないと。子どもが欲しくて悩んでる女性は、私だけじゃないんだ、ってね。早速、その病院へ予約の電話を入れ、電話口で『一番早くて3カ月後の予約』をとってからは、その日が待ち遠しくてしょうがなかった。これで、やっと悩みから解放される、って本気で思った。専門の本まで出している有名なドクターに治療してもらえれば、きっと子供ができるに違いない、って、何の根拠もなく確信に近いものを感じていた。そうやって、不妊専門クリニックにたどり着くまでに、結婚から5年かかった。それまでも、できることは何でもやった。誰かが“こうしたら妊娠できるらしい”と教えてくれたら、全部言われたことを実行した。子授け寺のお守りや、お祓い、占いや食事や栄養食品など、なんでもね！勿論、自分たちでできる努力も全て！でも、私たち夫婦の願いはかなわなかったし、かなえてくれる人もいなかった。だから、Yクリニックは、私が初めて出会った、『子どもが欲しいという願いをかなえてくれる人たち』のいるところだったの」

驚いたことに、20年以上前の話に登場する子授け寺のお守りやお祓いなどはすべて、現在も不妊当事者たちが興味関心を示す対象と同じだった。それらは、不妊を治療する時代以前から、当事者たちがずがる思いで手繰り寄せた、知恵と経験の産物であつたに違いない。不妊問題の解決に向けてあらゆる努力をし尽くしたと、彼女はあつく熱弁をふるった。

「待ちに待った初診予約の日。住所を頼りにYクリニックへ1時間以上も前に到着。クリニックに入ると、まるで、エステサロンのように豪華絢爛な内装で、施設内には

ゆったりとした音楽が流れ、20~30人分の待合室に100人くらいの女性が待っていた。中に入れぬ者は、クリニックからエレベーターまで廊下に立って並ぶ - あの光景は衝撃的だった！しかも、診察を待つ誰もがひと言も話をしない。そういえば、その後も通院を繰り返したけれど、誰かがおしゃべりしている場面は見たことがなかった。確かに、あまり居心地良くはなかった。まあ、私は“自分が不妊なのかどうかを確かめる”ために受診したし、治療すれば即妊娠するって思っていたから、あまり気にもしなかったけど。予約時間を2時間以上過ぎて名前を呼ばれ、初めて診察室へ。本に載っていた先生が笑顔で出迎えてくれ、『大丈夫です。私にお任せください』って言うしてくれたときはうれしくて涙が出たのを覚えている。どの病気でも同じだけど、はじめはいろんな検査が必要で、その説明の際に、『不妊の検査を(松・竹・梅の)どのコースでしますか?』って、いきなり聞かれた。ね、驚くでしょう?なんだかわけがわからないので説明を求めたら、『梅コースは医療保険の範囲内です検査。詳しい検査はできない』、『竹コースは保険と自費の両方をつかってする検査。梅コースより多少詳しい検査ができる』、そして最後に『松コースは、すべて自費です検査。お金はかかるけれど、最先端の技術で詳しい検査ができます』という説明があった。子どもがほしくて、悩んで、悩んで、意を決して不妊の検査を受けるつもりで病院に行った人が、『詳しい検査ができない梅コース』を選ぶはずないわよね?それだけでなく、“病院は病気を治してくれるところ”だと信じているもんだから、『最高の検査と治療をすれば、きっと子どもが授かるんだ』

って確信に近い思いを抱いたの。だって、『ダイジョウブ。ワタシニオマカセクダサイ』ってことは、子どもが授かるってことだと、誰でも思うでしょう?」

その問いかけは、まるで“否定することを許さない”かのように聞こえた。それにしても、20年以上前に受けた診察や病院内の様子を、これほどまでに鮮明にかつ詳細に記憶している人を彼女以外に私は知らない。その後、B子さんはYクリニックで金額も内容も最先端の不妊検査を約半年かけて済ませ、その検査結果を知る日が来た。

「検査の結果は主治医から聞くことになっていて、その日は主人も一緒にクリニックへ行った。名前を呼ばれて診察室に入ると、先生が『ご主人も結果を聞いていいんですか?どうなっても知りませんよ!』って、強い口調で・・・とっさに私は『ああ、きっと、私に不妊原因があるのだ』って感じた。その時はすでに泣いていて、診察室にいる間ずっと涙が止まらなかった。でも、結果をよく聞いてみると、『特に不妊の原因はどちらにもない。あえて言うならば、奥さんの卵管が普通の人より細くて、卵子が通りにくいかもしれない。排卵にも問題ないが、今後卵管を通りやすくする処置や、思い切って卵管を広げる手術をしたほうがいいかもしれない』これって、原因はないけど、さらに妊娠しやすくする方法はある・・・みたいなあいまいな説明だった。その時、『手術をすれば妊娠しやすくなるんですか?』と尋ねると、『しないよりしたほうがいいでしょうね』という返事だったので、手術を即決したのよ、自分でね。その手術の後に、さらに不妊治療の長くつらい日々が続いていくとは、思いもよらなかったから・・・」

確かに現在でも、卵管閉塞の不妊原因のある女性が多いといわれる。処置は個別であるが、時に簡単な腹腔鏡手術が用いられることがあり、その大半は日帰りで処置が終わるといふ。近年、医療技術は確実に進化し、20年以上前にB子さんが受けた全身麻酔による開腹手術を実施するケースは激減した。現在は、排卵障害などに対応する生殖医療技術として体外受精などが普及し、以前より女性のリスクは減少しつつある。

「不妊は治療できる」 - この吉報は、実子をのぞむ不妊カップルにとって、まるで神からの福音と同様の響きであったに違いない。これまで、時代を超え、長い沈黙の歴史を刻んできたカップルの不妊問題に、唯一、医療が解決手段を提供したのだ。治療すれば、あきらめるしかなかったわが子の誕生を期待しながら生活できる。「不妊を治療する」という“努力ができる”のだ。これからは、ひたすら妊娠を待ちのぞみながら、なすすべもなく再び沈黙の時間を繰り返す日々は来ない。少なくとも、今までの生活とは何かが変わるに違いない - そんな期待が生まれたはずだ。ひとは、時として、直面する問題に対する解決手段を持たないことを知った時、自らの無力さを実感し、生きる気力さえ失うことがある。過去に、不妊問題をかかえたカップルは、ふたりでいくら努力しても「自然には子どもが授からない」という不妊問題に直面し、結果、その現実を受け入れ「実子をあきらめた人生」を送る以外に選択肢はなかった。しかし、生殖医療から届いた福音は、実子をもつ可能性を示唆するものであり、同時に、実子をまだあきらめなくていい、というメッセージを当事者たちに送っていたのだ。

B子さんは「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」と、はっきりとした口調で私に告げた。私は、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出して尋ねてみた。(次号につづく)

## <付録：今日のトピックス>

2010年8月25日MSN産経ニュース内「政治」の最新ニュースにこんな記事があった。

「自民党の野田聖子元郵政相、体外受精で妊娠」 - 渡米し、第三者から提供された卵子を用いた体外受精で妊娠したという。日本国内では、まだ法整備されていない「提供卵子による体外受精」で妊娠したようだ。49歳という年齢を考えると、あとは妊娠の継続と元気な赤ちゃんの誕生を願わずにはいられない。彼女もやはり、産みたかったのだ。